

2 日目

・4:40 苗場山山頂を目指す。泥濘の中の古い木道を抜けると、整備された木道に出た。

・4:45 登頂 2145m。遠くの山々は霞み、所々に残雪。露に濡れた湿原に、足を進める我々の姿が、大きな影絵となって映し出されていた。湿原の小さな池にはサンショウウオの卵があり、木道の脇にはとてもかわいい水芭蕉、ワタスゲ…、他の植物にはまだ早い季節らしい。

湿原を過ぎると一気に下降。クマザサの間を抜けると低木の通路。見つけたカタツムリが猛禽類の餌にならぬよう、枝の後ろに隠すやさしい山人もいた。クレナイサラサドウダンの落ち着いた朱色がなんとも美しい。その後、湿原の周りを取り巻く大きなドウダンと何度も



苗場山の朝



小松原湿原を目指し出発

出会えた。

「股すり」と表示のある岩場では、先頭が登りながら「股なんか擦らないじゃないか。」とブツブツ。再び湿原に出る。女性軍は間々に姿を見せる植物の名前を確かめたり写真に撮ったりと、つい速度が鈍りがち。途中、登山道の崩落も見られ、元の道は切り立った崖になっていた。雪深い山は本当に谷が深い。

・6:00 泥道を抜けると雷清水。冷水が乾いた喉を潤す。皆、手や顔を洗い、千葉の水と入れ替える。

・6:25 神楽ヶ峰 2030m

深い谷の向こうに田代湖が光っている。ドラゴンドラやシフト支柱が見える。せっかく下ったと思ったらまた登る、ということが何度も繰り返される。

リーダーが「（歩くのが）無理そうだったら、言ってくださいね。この先、エスケープコースがないですからね。小松原分岐を過ぎたら、行くしかないですからね。」とみんなの様子をチェック。アップダウンを繰り返し、霧ノ塔に向かう。

・9:55 霧ノ塔 1993.6m ブヨに取り囲まれ、どうしようもない。私達方が新参者なのだが、恨みたくなる。湿原が終わると一気に下る。長い草が登山道を覆っており、滑らないよう慎重に進む。



日蔭山付近



まだまだ遠い道のり

10:05 日蔭山 1860m

ゆっくり食事。風が強かったが、お湯を沸かしてちょっと一服。

・10:25 また、分岐。まだ花の時期ではないようで、どこの湿原もまるで草紅葉の中にワタスゲが生えているよう。湿地の中の池にはモウセンゴケ、木道の脇には が顔を見せる。



10:45 小松原避難小屋

三角形の割にきれいな小屋だ。前日か、停まった形跡がある。しかし、みんな、一人では泊まらないと言う。人がほとんど通らないせいか、木道の老朽化をそのままにしてある箇所も目立つ。中屋敷分岐に出る。アップダウンを繰り返し、疲労困憊。それに暑い。

2 時過ぎに降り出した雨がすうっと冷気を運んでくれた。木々のお陰で濡れないし、雨も何時の間にか止んでいた。

金城山の左側を抜けるとものすごい急坂。リーダー、サブリーダーが「最後の急坂ですよ。ここを降りると到着ですから、気を抜かないで。」と、注意喚起。用心しながら降りていく。兎も角、真っ直ぐに落ちていくという感じ。降り切って振り返ると、本当に真っ直ぐ登山道が落ちていた。

途中、沢を渡り、巨大な岩群を渡る場面もあった。兎も角、様々な要素に富んだ山だ。途中ですれ違った登山者は一人のみ。亡くなった学生の碑もあった。やはりかなりハードな山なのだ。

・15:35 風穴駐車場。我々はここでくつろいだり、風穴を見に行ったりと、思い思いに英気を養うことができたが、ドライバーのリーダー・サブリーダーは息つく暇もなく車を取りに行った。1 時間ほどして戻ってきた二人は疲労困憊という感じ。本当に大変でした。

・17:00 小赤沢温泉。鉄分がそのまま湯に溶けたという感じで、疲れを癒してくれる。シャワーで流そうとすると、地元の人が「いい湯なんだから、きれいになるから流しちゃダメ。」と教えてくださった。「きれいになるかなあ？」の声に、「まあ、1 週間ぐらいはつからないと私みたいにならない。」とのこと。

ゆっくりと疲れを取り、のんびり入っていたら、男性軍はすでに上がっていた。

急登・急坂の下山はもうたくさん！と思ったのに、すぐに登ってみたいくなる山は不思議だ。2 台の車はここで別れて、一路千葉へ。(文責:寺崎)